

全国を駆け巡った2年間

及川昭文^{†1}

1993年度から2年間、主査として人文科学とコンピュータ研究会の運営にあたったが、この間の研究会のありようを振り返る。

Two Years for Travelling all over Japan

Akifumi Oikawa^{†1}

This manuscript describes SIG CH's activities during two years when I was nominated for the chairperson of the committee since FY 1993.

1. はじめに

筆者が主査を務めたのは1993年度からの2年間で、この間、表1のように8回の研究会が実施された。表からわかるように、この2年間東京、大阪といった中央では一度も研究会を開催しなかった。その是非はともかく、この時期に何を目標にしていたかを問われても、20年も前のことであり、いささか答えに窮する。覚束ない記憶と、いくつかの資料をひもときながら、当時のことを振り返ってみたい。

表1 研究開催日時・会場一覧

No.	開催日時	開催会場	件数
18	1993.5.21	京都工芸繊維大学	8
19	1993.9.3	ミネソタ州立大学秋田校	6
20	1993.11.26	岡山大学	7
21	1994.1.28	鹿児島大学	8
22	1994.5.27	諏訪市博物館	6
23	1994.9.16	東北工業大学	9
24	1994.11.18	沖縄県立図書館	8
25	1995.1.27	北海道開拓記念館	8

2. IT環境と研究内容

1990年代のIT環境を思い起こしてみると、1990年にWindows 3.0が、そして1991年にWindows 3.1が発表され、本格的なパーソナル・コンピュータ（以下、PC）時代の到来を感じさせる時期であった。また、CERN (Conseil Européen pour la Recherche Nucléaire : 欧州原子核研究機構) のTim Berners-Leesが提唱したWorld Wide Webが公

開されたのは1991年で、1993年4月30日にCERNはWWWを無償で公開することを発表し、インターネット時代の始まりを予感させた時期でもある。そして、この時期はホスト・コンピュータを利用した研究もまだ残っており、ホスト・コンピュータからPCへの移行期ということもできる。

3代目の主査である八村広三郎（立命館大学）が2007年に第1～74回に発表された624論文について、「分野」「対象」「手法」のそれぞれについてキーワードを付与したので、これを参考にこの時期に発表された60論文を概観してみる。

研究分野を集計すると表2のように「情報学」が12論文ともっとも多いが、言語学の「パソコン LAN と語学学習」、心理学の「心理学分野でのコンピュータ支援学習システムの開発」などのように「教育」に含めてもよいものが5論文（「言語学」が1、「心理学」が1、「日本語」が2、「文学」が1）あり、これらを足すと「教育」が15論文となる。「教育（15）」と「情報学（12）」で27件となり、発表件数のほぼ半数となる。「情報学」の発表が多いのは当然であるが、「教育」の分野の研究が多いわけについては、研究成果が見えやすい、PCを活用する場として教育

表2 研究分野の内訳

情報学	12	図書館学	2
教育	10	言語学	2
芸術	7	法律	1
認知科学	5	文学	1
歴史	4	博物館	1
考古学	4	地理	1
文献学	3	国文学	1
心理学	3	総合	1
日本語	2		

*†1 総合研究大学院大学
The Graduate University for Advanced Studies

現場が適しているなどがその理由ではないかと推察している。

研究の内容をくわしくみていくと、「計算機用日本語辞書の開発」「映像データの収集利用方式の開発」「パソコン通信と文字放送の相互交流システムの構築と運用」などのように「情報学」の分野では、基盤的な研究がその大半を占めている。この傾向は「ビデオによる古文書画像の効率的入力法と接続処理（歴史）」「美術作品の研究を支援するメディアハンドリングツールの構築について（芸術）」「知的生産システム Wadaman の仮想現実環境の評価（認知科学）」「パーソナルコンピュータによる中期インド・アリアン聖典の計算機解析（文献学）」などのように他の分野でも同様で、普及し始めた PC 上で動くさまざまなツール開発が中心の研究が数多くみられる。

別の視点からこれらの論文を見てみると、60 論文のうちほぼ半数の 28 が単著であった。その後単著の割合はだんだんと減っていき、2000 年代には 30%を切ってくるのであるが、研究会発足からこの時期（1989-93 年）まではほぼ 50%であった。

第一期の幹事であった洪政國は、「例えば、SIGCH の研究会の参加者には非会員が多く（およそ 30 %）人文科学分野の専門家であった。SIGCH の設立趣旨や発展を考えると、このような非会員が研究会に参加しやすくなる必要があるということで、1991 年には情報処理学会に対応案を依頼、提案した」と述べている。[1]

この文系の研究者が 30%も占めるということは、情報処理学会という理系の学会では異例のことである。一般的に文系の研究はもともと個人研究が多いということから、単著の発表が増える傾向にあることは否めない。ただ、それだけでなく、この時期は、文系・理系を問わず研究者がそれぞれ個人で工夫を凝らしていた時代で、いまだ文系・理系の協同に至っていないということが出来る。すなわち、基盤的、基礎的な研究であれば、それぞれの専門家の助けがなくても、それなりのツール開発ができたのありうと推察している。

3. 全国制覇をめざして

何を目標にしていたか覚束ないと述べたが、確たる目標が一つだけあった。2006 年 10 月 26 日に達成することになる 47 都道府県での研究会開催である。初代の杉田主査のころからできるだけ地方での研究会開催を増やそうという雰囲気はあったが、いつの間にか日本全国での開催をめざそうということになった。この全国制覇を提唱したのは筆者ということになっているが、いつそれを言い始めたのかは思い出せない。いずれにせよ、筆者が主査になったときには、全国制覇は研究会の暗黙の目標となっており、この 2 年間はすべて地方で研究会を行った。

筆者の考える地方開催のメリットは 2 つある。一つは地

方大学などの研究者の参加を促すということである。とくに人文系の研究者は科研費などを獲得していない限り、東京や大阪といった中央での研究会に参加するための旅費が慢性的に不足しており、地元あるいは近隣での研究会開催は彼等にとって大きなメリットとなる。

もうひとつは前夜祭である。地方開催ということで、主査、幹事を中心にそれなりの数のメンバーが前日から現地に入ることになり、必然的(?)にその夜は飲み会（今では「情報交換会」）となる。アルコールが入れば、文系も理系もなく、口がなめらかになり、昼間には言えないようなことも忌憚なく議論し合うことになる。この前夜祭の議論の積み重ねによって、お互いどのような考え方をするのか、それぞれの発言の土台になる考えというものが、すこしずつ理解し合えたような気がする。つまり、そのような前夜祭が、その後の文系・理系のコラボレーションへとつながっていったのではないかと推察している。

もっとも、「研究会の地方開催には、地方の研究活性化と会員の懇親を深める目的があったと理解している。だがはたして単発の地方開催が本当に研究活性化につながっているかという、やや疑問が残る。地方の開催地の研究者がその後の研究会で発表を重ねるといふ事例が、決して多くないように見受けられるからである。地方開催によって会員の懇親を深めるという面は、たいへん成功しただろう。その一方で参加者が固定化し、「新参者」が入り込みにくい雰囲気が出てしまっていないかという心配はある。もっともそんな心配は杞憂なのかもしれない」といった意見もある。[2] 地方開催を主張してきた筆者としては、おおいに反省しているところである。ただ、ちょっとだけ言い訳をしておきたい。

主査、幹事、運営委員そして開催校の研究者など、研究会の「世話係」はすべてボランティアである。ボランティアの活動が永續する秘訣は、本人にとってその活動が楽しいことであることだと思っている。筆者にとって、未知の土地を訪れ、未知の研究者と語り合うことは実に楽しいことであった。たとえ、翌日二日酔いになったとしても、もちろん、多くの研究者に CH 研究会を認知してもらい、その知名度を高め、一人でも会員を増やす、活性化を図るといった大義名分はあったけれども、やはり楽しいから 2 年間全国を駆け巡れたのではないかと考えている。

もともと、この「人文科学とコンピュータ研究会」そのものが、そのような“飲み会”から生まれたと言っても言い過ぎではない。1988 年 8 月 16-20 日にシンガポールで、IBM 主催の“教育機関エグゼクティブ・コンファレンス”が開催された。初代主査の杉田、筆者、そして洪が参加し、シンガポールの夜にこの 3 人のなかで研究設立の話がうまれたことは、生まれて初めて食べたドリアンの味とともに、はっきりと覚えている。まさに「じんもんこんは夜作られる」である。



シンガポールにて杉田先生と洪さん 1988年8月

4. 重点領域研究への申請, そして採択

1993年は研究会にとって、大きな節目の年であった。すなわち、科学研究費の重点領域研究への申請、そして採択された年である。

筆者の手に2冊のキャンパスノートがある。1冊目には1993.12.15～1994.1.18、2冊目には1994.1.19～と日付が、そしてタイトルには「重点領域申請」と記されている。このノート(1冊目)の3頁には計画班代表者の氏名が、

及川昭文 48才
小沢一雅 51才 安永尚志 50才
八村広三郎 45才 村上征勝 48才

と年令(1994年2月1日現在の)とともに書いてある。この計画班のテーマおよび代表者選びは、できるだけ若い人(いまはみな老年であるが)をと、筆者の独断で決めた。その後の経過を見ればこの人選は間違っていなかったと自画自賛している。12頁には申請書の目次案が、そして16頁には以下のように記されている。

日程

- 第0版 1月5日(水)完成, 発送
1月15日(土)各計画班原稿〆切
- 第1版 1月25日(火)完成
1月26日(水)or 27日(木)大阪ミーティング
杉田, 八村, 小沢
- 2月1日(火)or 2日(水)東京ミーティング
安永, 村上, 洪, 国研
- 第2版 2月7日(月)完成, 発送
2月14日(月)最終コメント〆切
- 第3版 2月17日(木)完成, 製本
2月18日(金)提出

当時の手帳をみると大阪ミーティングは26日の17時から、東京ミーティングは2月4日(金)の17時から行っている。それまで、研究会や前夜祭で議論を重ねてきていたが、構想を具体的に文字にし始めて2ヶ月あまりで申請書を完成したのは、その内容は別にして驚異的なスピード

表3 人文科学研究におけるコンピュータ利用の段階

レベル I	これまで手作業で行っていたことを、単純にコンピュータで代用させる。	・ワープロの活用 ・テキスト処理 ・初歩的統計処理 → 情報の流通
レベル II	手作業では困難であったことをコンピュータを利用することによって、より効率化、省力化を図る。	・パソコンの活用 ・イメージや音声の処理 ・高度な統計処理 → 標準化、ソフト開発
レベル III	コンピュータを利用しなければできないことを行なう。	・マルチメディア処理 ・多変量解析 ・ネットワーク → 知的生産

といってもいいだろう。これまでこの申請書については、公にすることがなかったので、若干説明しよう。

申請書は、「1. 新規領域の必要性, 2. 研究動向, 3. 研究概要, 4. 研究業績, 参考資料」といった構成になっており、第1章の第2節「研究の目標」では、表3を示しながら以下のように説明した。

「コンピュータ」「情報科学」がカンフル剤として有効に機能するためには、人文科学研究のコンピュータ利用の現状を把握する必要があるが、人文科学研究のコンピュータ利用の段階を大きく分けると表3ようになる。既にレベル II に達している先駆的な研究もあるが、それはまだまだ少数であり、大部分はレベル I から II への移行期にあると考えられる。したがって、その促進を図りレベル II への移行を容易にすることを目標に、研究基盤の整備を推進する必要がある。

そして、3つの研究目標を図1のように示した。「データベースの流通促進」では、①データベースの共有化、②流通体制の整備、③資料(史料)のデータベース化支援を「ソフトウェアの開発」では、①性能・機能・ユーザインターフェースの向上、②既存ソフトウェアの活用、③マルチメディア対応を、「研究者支援」では、①研究情報共有体制の確立、②発表・議論の場の確保、③若手研究者の育

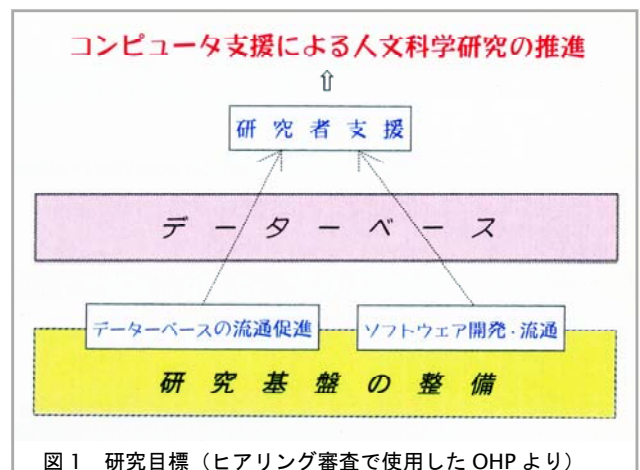


図1 研究目標(ヒアリング審査で使用したOHPより)

成を具体的な目標として掲げた。そして、以下のようにまとめた。

大砲の弾道の軌跡を計算するために世界最初のコンピュータが1945年に誕生して約半世紀が過ぎ、コンピュータ利用も「計算をする道具」から「情報を処理する道具」へと変化してきており、いまや「思考を支援する道具」へと発展しつつある。そのような道具を利用し、情報学や統計学等の諸科学の手法を適用することによって、人文科学研究にこれまでとはまったく異なる研究の視点が生まれてくるであろうということは容易に想定でき、そして新しい研究手法の開発、確立が期待される。

これまで述べてきたようなことが研究期間内に十分に達成できるかどうかは、現時点においては100%の保証はできない。しかし、結果が分かればそれは単なる作業であって、「研究」に値しないであろう。結果が分からないからこそ、未知のものを解明しようとし、新しい知見を得ようとするのであり、それが達成できたときの喜びも大きいのである。

本重点領域研究は現代の最先端の技術の一つであるコンピュータを知的活動の道具としてどこまで利用できるかを実証し、新しい人文科学研究のあり方を模索しようとするものである。それは21世紀を目指した新しい人文科学研究の幕開けということができよう。

申請書のできがよかったのか、単に運がよかったのかは神のみぞ知るであるが、書類審査をパスし、5月18日のヒアリング審査に及川、安永、八村の3名で臨んだ。その審査会の会場に杉田先生が審査委員としていたのは、偶然とはいえ実に幸運なことであった。幸運は更に続き、一回の挑戦でみごと採択となった（当時、1回目の領域申請で採択される人文系の重点領域は非常に稀であった）。その後翌年からの重点領域開始をめざして準備を進め、公募研究の申請を促すことを目的に、説明会を兼ねた「シンポジウム『人文科学とコンピュータ』1994」を10月22日に統計数理研究所（当時は、立川市ではなく港区南麻布にあった）で開催した。この時の参加者の数は100名を超えた。以下はその時の案内文（抜粋）である。

重点領域「人文科学とコンピュータ」がめざしているのは、「コンピュータを利用した人文科学研究の活性化」、そして「新しい研究の視点・手法の確立」であり、そのためには「データベースの共有化」「基本ソフトウェアの開発・流通」といった研究基盤の整備がなされなければなりません。このような研究基盤の整備を達成するためには、できるだけ多くの研究者の本重点領域への参加が不可欠です。すなわち、多くの研究者が公募研究に申請していただくことが必要です。

ところが、これまでの人文系の重点領域の公募研究の申請件数は多くても50件程度でした。理由はいろいろあると思いますが、ひとつはこれまでの重点領域の多くが「計画研究」中心で、「公募研究」はどちらかといえば「さしみのつま」みたいな位置づけしかなされていないことにあるのではないかと思います。本重点領域では、その研

究対象が広範囲にわたっており、計画研究班のみでは十分にカバーしきれないというようなこともあり、公募研究を予算の許す限り多く採択することを基本方針のひとつとしています。また、予算の配分も、従来の重点領域に比べて公募研究への配分を多くできるように考えています。

公募研究の申請が少ないもう一つの理由としては、PR不足を挙げることができます。どのような重点領域研究が始まるか、関係者を除けば「公募要領」を読むまで分かりません。また、「公募要領」だけでは、どのようなことをめざし、どのような研究を公募研究として求めているのか、よく理解できない場合が少なくありません。そこで、本重点領域では、そのようなことのないように、いろいろなプロモーション活動を試みる予定です。今回のシンポジウムもその一環であり、できるだけ多くの研究者に参加していただき、重点領域「人文科学とコンピュータ」をよりよく理解していただきたいと思っています。

これ以降、4年間再び全国を駆け巡ることになった。

5. おわりに

いまでも思っていることであるが、やりたかったけどできなかったことが二つある。一つはワークショップの開催である。地方開催ということになれば、主査・監事を含め地元以外の参加者の多くはたいてい前日から現地入りすることになる。ならば、前日の午後に要望の多いトピック（たとえば、統計処理、GIS、データベース、標準化など）を選んでワークショップを開けば、参加する機会の少ない地元の研究者や学生にとって有意義なものになるのではないかと考えられる。もっとも、授業開講の厳格化でなかなか休講にできない今日のごころでは、実現が難しいのではないかと思っているが。

もうひとつは、学生の教育の場として研究会を活用できないかということである。筆者にとって研究会とは、たんなる研究成果を発表する場としてだけでなく、参加者同士で情報を交換し、議論をする、そして教育の場である。だから、発表10分、質疑応答20分というような議論が主の発表とか、具体的には思いつかないが教育的なプログラムを実施するなど、発表を聞くだけの研究会にしない工夫が必要ではないかと思う。

最後になるが、全国制覇に狂った主査のわがままに2年間もつき合ってくれた、いまは亡き長瀬真理さん、八村先生、竹内健君（当時、丹青研究所）にあらためて感謝いたします。

参考文献

- 1) 洪 政國：じんもんこん ―設立経緯と最初の4年間―、情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」全国制覇記念誌、pp.18-19 (2007)
- 2) 山田奨治：じんもんこんの思い出、そしてこれから、情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」全国制覇記念誌、pp.26-28 (2007)